

心豊かでたくましい児童生徒を育む

小中一貫教育をめざして

# シリーズ えでゆれば vol.32

## 子どもたちの想い

三戸小学校と三戸中学校が施設一体型の校舎として開校するにあたり、2年前に保護者の皆さまにはアンケートへご協力をいただきました。自由記述の欄には「中1ギャップの解消、学力の向上、思いやりの心を育むことなど、子どもたちが心身ともに健やかに成長することを期待する」という記述が多く寄せられました。

一方で「中学生の問題行動が小学生にまで影響を及ぼすのではないか」という問題行動の低年齢化など、小中学生が一緒になることのデメリットもあるのではないかとという不安の声も寄せられました。

では、実際に開校前と開校後で子どもたちの様子はどのように変わったのでしょうか。



今回は、先月号でも紹介された、三戸地区少年防犯弁論大会で最優秀賞を、その後進んだ青森県少年防犯弁論大会東部大会で優秀賞を受賞した、小中一貫三戸学園9年生の穂積日奈子さんの発表原稿をご紹介します。※文面は、10月30日に同校で行われた「三戸小中学校フェスティバル」ステージ発表用に簡略化し、小学生も含む全校児童生徒と保護者の前で読み上げたものです。

## 絆を守るために

穂積 日奈子

「中学校へ入学おめでとう。君たちは三戸小中一貫校で、初めての卒業生になるんだ。」

入学したときから言われ続けてきた言葉。一期生として卒業できる喜びと誇らしさ、それと同時にプレッシャーとなる言葉。

中一の私は、勉強も部活も頑張りたい、友達もたくさん作りたい、とにかく前進することばかり考えていました。しかし、目の前にある現実には衝撃を受けたのです。2年前の三戸中学校は、今とは違い、荒れた学校でした。「このままでは、人生一度きりの中学校生活がもつたいない。学校のためになることを一つでも多くやりたい」そう考えた私は、生徒会執行役員として活動することを決めました。

生徒会での最初の仕事は、文化祭の企画、運営でした。もちろん計画通りに進みません。それでも思い出になる行事にしようと、後夜祭まで

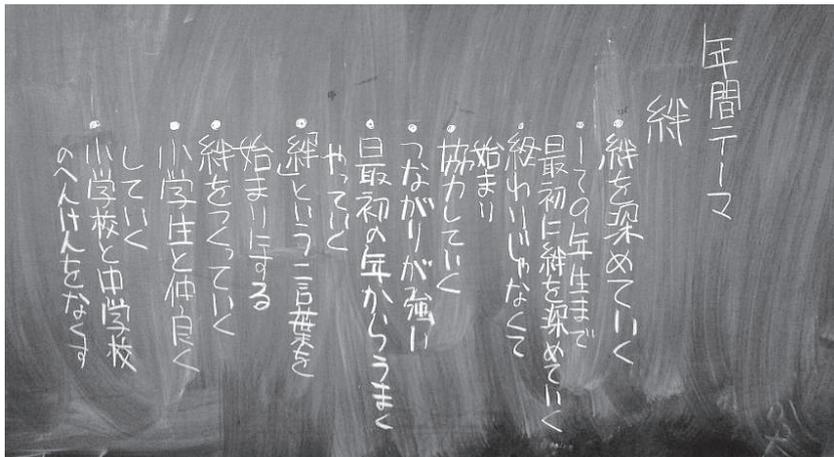
の準備を頑張りました。文化祭当日、途中、ステージ発表が中断になる場面もありましたが、先生方や生徒会の仲間の頑張り、多くの励ましがああり、何とか乗り切ることができました。文化祭で得たもの、それは、同じ目標に向かい、互いの頑張りや認め合ったからこそできた「絆」です。「三戸中学校は変わるはずだ。」心が奮い立ち、学校のためという思いがさらに強くなりました。ここで生徒会では、あいさつ、清掃、遅刻0プロジェクト等、一つの目標に向かい全員で取り組む活動を企画しました。一人でも「自分から実践してみよう」と意識を変えてくれたら。そんな思いで定期的にプロジェクトを行っていると、少しずつ変化が見られました。遅刻の数が減り、あいさつをするようになり、清掃もきちんと行うことができるようになってきたのです。継続することが一人一人の力となり始めました。

今年、小中一貫三戸学園での新たな生活がスタートし、私は九年生という最上級生になりました。小中一貫校になってから、一番楽しく、多くを学べた行事は、一年生から九年

( )  
生まで全員で行った合同体育祭です。最初は後輩を気遣えず、不安な思いをさせてしまいました。しかし共に生活することは、両方の立場で考えなければいけないということを知ることができ、心温かい行事となりました。そこには、二年前の文化祭で感じた絆がありました。

三戸学園の児童生徒会のテーマは、「絆」です。「絆」の強さは努力した分だけ強くなると思います。目の前にある壁を仲間と乗り越えることができると結ばれる強い絆。そんな絆が、三戸学園じゅうに広がるのが私の夢です。もちろん一人ではこの夢を達成することはできません。だから、今の私にできることは、目の前にある可能性を信じ、あきらめずに努力することです。いつか、「ここまでがんばったから大丈夫」「私たちならきっとできる」そんな思いを一人一人がもって学校生活を送ることができたら、友情が深まり、信頼が生まれ、絆が強くなると思います。そのために、これからも努力を惜しまず、挑戦し続ける自分でありたいと思います。三戸学園第一期卒業生として、絆を守るために。

一貫校として第一期の卒業生になることへのプレッシャーに対し、何ができるかを考え、実践し、自分たちの手で学校を変え、さらには新たな伝統をつくり出すと立ち向かってきた様子が目に見えるようです。  
また、今はその役目を終えた旧三戸中学校の生徒会室の黒板には、次のような想いが刻まれています。



- ・ 1〜9年生までの絆を深める
- ・ 校舎が閉じるのは、終わりではなく新たな伝統の始まり
- ・ 最初の年からうまくやる
- ・ 小学生と仲良くしていく
- ・ 小学校だから、中学校だからというこれまでの偏見をなくす

原文のままではありませんが、生徒会執行部はこのような想いで開校に臨んだ様子が見えます。

9年生を中心とした実践を、後輩である1〜8年生はどのように感じているのでしょうか。

新児童生徒会長の平圭登くん（8年生）は「9年生が今までつくり上げてきた小・中の絆を、より良いものにするよう頑張りたい。小・中それぞれの良い伝統を認め合い、偏見のない思いやりにあふれた学校にしていきたいと思う。そのために、小・中が何らかの形で交流できるようなものを企画し、実践していきたいと思う。9年生がつくり上げてきたものを越えられるよう、児童生徒のトップであるという自覚を持ち、頑張りたい」と決意を語ってくれた。

した。

絆というバトンは、しっかりと次の代につながりました。

穂積さんの発表原稿や平くんの決意からも分かるように、中学生の行動には小学生の良き手本でありたいという強い気持ちが見えます。

冒頭で紹介した不安の声は、こういった中学生の自覚と小中の両校長の学校経営により杞憂に終わっていないのではないだろうか。

実際に遅刻や問題行動の減少など、数値的にも改善の傾向にあることは見て取れます。

上級生の下級生を思いやる気持ち、下級生の上級生に対する憧れの気持ちは、確実に育まれつつあります。

子どもたちが自ら新しい伝統をつくりあげていくためには、身近な大人である先生や保護者だけでなく、地域の大人の支援が大きな力となります。

今後とも、学校に対するご支援とご協力をよろしくお願いいたします。